

診療情報管理士養成校の学生における
業務内容の理解度について

高橋真悟・須田直樹・大川喜代美・木村憲洋

Study of comprehension in work
by health information manager school students

Shingo TAKAHASHI · Naoki SUDA · Kiyomi OKAWA · Norihiro KIMURA

高崎健康福祉大学紀要 第18号 別刷

2019年3月

診療情報管理士養成校の学生における 業務内容の理解度について

高橋真悟・須田直樹¹⁾・大川喜代美・木村憲洋

(受理日 2018年9月14日, 受稿日 2018年12月20日)

Study of comprehension in work by health information manager school students

Shingo TAKAHASHI · Naoki SUDA¹⁾ · Kiyomi OKAWA · Norihiro KIMURA

(Received Sept. 14, 2018, Accepted Dec. 20, 2018)

アブストラクト

本学医療情報学科では、平成17年度より日本病院会の診療情報管理士育成の指定大学となっており、診療情報管理士の養成を行っているが、診療情報管理士の意義や業務内容に対する意識については学生の間にも相違があると推測でき、実務レベルの高い診療情報管理士の育成に至っていない可能性が考えられる。本報告では、本学で診療情報管理士の資格取得を目指す学生にアンケート調査を実施し、学生の診療情報管理士に対する業務内容の理解度について検討した。

今回の調査では、学生は診療情報管理士の主な業務は診療情報に関する業務であるとの意識が強い結果となったが、回答の割合についてもバラつきがあった。今後、医療機関で働いている診療情報管理士に対して同様な調査を行い、学生との相違を検討することで、より実務に近い教育を提供できるようになると考えられる。

1. はじめに

診療情報管理士の業務は、診療情報の内容精査を行い、精度の高い情報管理を行うとともにその情報に基づき高機能なデータベースの構築とデータの管理活用を担う¹⁾。情報化が進む今日、医療機関では診療情報管理士の存在は必要不可

欠なものとなっており、診療情報管理士の養成や人材育成が重要となっている。

診療情報管理士は四病院団体協議会（日本病院会、全日本病院協会、日本医療法人協会、日本精神科病院協会）および医療研修推進財団の共同で認定された資格であり、年に1回認定試験がある。2018年5月現在で、診療情報管理士認定者は35,833人となっており、認定者数は年々増えている²⁾。そのなかで本学医療情報

1) 公立藤岡総合病院

学科では、平成 17 年度より日本病院会の診療情報管理士育成の指定大学となっており、診療情報管理士の養成を行っている。本学の診療情報管理士の認定試験結果は、合格率が高く（平成 29 年度合格率；全国 66.3%，本学 100%）³⁾、多数の診療情報管理士の合格者を輩出している。しかし、本学の診療情報管理士の教育については実務レベルで指導を行う科目は少なく、実務を経験できるのも 2 週間の病院実習のみとなっている。診療情報管理士が行う業務についても医療機関ごとで違う場合もあり、これらの背景から診療情報管理士の意義や業務内容に対する意識については学生の間にも相違があると推測でき、実務レベルの高い診療情報管理士の育成に至っていない可能性が考えられる。

本報告では、本学で診療情報管理士の資格取得を目指す学生にアンケート調査を実施し、学生の診療情報管理士に対する業務内容の理解度について検討した。また、医療機関への就職を希望しているものと希望しないものの 2 群に分けて解析を行った。

2. 研究方法とアンケート

2.1 方法

アンケートの実施時期は 2018 年 2 月～3 月である。本報告の対象は本学医療情報学科において診療情報管理士の資格取得を目指す 29 名（男性 8 名、女性 21 名、平均年齢 20.9±0.5 歳）である。なお、対象者は診療情報管理士における病院実習をすでに実施している。対象者の属性を表 1 に示す。

アンケートの職業意識の項目（Q2）については、診療情報管理士業務指針を参考に独自に作成した⁴⁾。また、対象者属性などの項目につ

表 1 対象者の属性

性 別	男性 8 名、女性 21 名
学 年	3 年生 28 名、4 年生 1 名
成績の自己評価 (10 段階)	6.3±1.2
医療機関への就職希望	希望する 25 名 希望しない 4 名

いては、医療機関に勤務している者と共同で作成した。回答データの解析については、SPSS 12.0J for windows を用いた。各質問については回答割合を算出し、医療機関への就職を希望しているものと希望しないものの回答の比較については Fisher の正確確率検定を行った。

倫理的配慮として、事前に文書による説明を行い、無記名の同意書およびアンケートの回収をもって対象とした。なお、本報告は高崎健康福祉大学倫理委員会の承認を得ている（高崎健康大倫第 2943 号）。また本報告について申告すべき利益相反はない。

2.2 アンケート調査

質問は Q1～Q22 となっており、アンケートの回答時間は約 10 分程度のものとなっている。なお、職業意識に関する質問については Q13 までとなっており、それ以外に病院実習や資格試験についての項目も調査している。本論文では職業意識について検討しているため、Q1～Q13 までを検討した。下記に質問の全容を記載する。Q11、Q12 については、選択は 1 つのみであり、その他の質問は複数選択としている。

なお、Q3～9 については、Q2 で選択したものについて回答させるようにした。

Q 1. 回答者情報：性別、年齢、学年、成績の自己評価（10 段階）、医療機関への就職

希望の有無.

- Q 2. 診療情報管理士の業務において、主であると思うものをすべて選んでください.

選択肢

1. 診療情報の管理業務
2. 診療情報の作成業務
3. 診療情報の活用業務
4. 診療報酬の請求業務
5. 診療情報提供の業務
6. 診療情報の点検業務
7. DPC業務 (Diagnosis Procedure Combination : 診断群分類)

- Q 3. 診療情報の管理業務において、主であると思うものをすべて選んでください.

選択肢

1. アリバイ管理
2. 情報機器の活用・電子化
3. 保管場所の確立
4. その他 ()

- Q 4. 診療情報の作成業務において、主であると思うものをすべて選んでください.

選択肢

1. コーディング
2. がん登録
3. サマリ作成 (代行)
4. その他 ()

- Q 5. 診療情報の活用業務において、主であると思うものをすべて選んでください.

選択肢

1. 統計・分析
2. 院内勉強会
3. コーディング委員会
4. クリニカルパス作成
5. その他 ()

- Q 6. 診療報酬の請求業務において、主である

と思うものをすべて選んでください.

選択肢

1. 入院会計
2. 外来会計
3. 返戻・減点処理
4. 未収金管理
5. その他 ()

- Q 7. 診療情報提供の業務において、主であると思うものをすべて選んでください.

選択肢

1. 診療記録の開示
2. 適時調査・個別監査の対応
3. 臨床研究・学会
4. その他 ()

- Q 8. 診療情報の点検業務において、主であると思うものをすべて選んでください.

選択肢

1. 量的点検
2. 質的点検
3. 院内監査
4. その他 ()

- Q 9. DPC 業務において、主であると思うものをすべて選んでください.

選択肢

1. 医療資源病名 (最資源病名)
2. 様式の作成
3. その他 ()

- Q10. 診療情報管理士が関わる他の職種は何があると思いますか？当てはまるものすべて選んでください.

選択肢

1. 医師
2. 看護師
3. 医療事務
4. 薬剤師

5. 診療放射線技師

6. PT・OT・ST

7. 上記以外

8. すべての職種

(PT：理学療法士，OT：作業療法士，ST：言語聴覚士)

11. 忍耐力

12. その他 ()

なお，Q13については日本経済団体連合会が行っている新卒採用に関するアンケートを参考に作成した⁵⁾。

Q11. 診療録管理体制加算について，理解していますか？

選択肢

1. よく理解している
2. 少し理解している
3. どちらともいえない
4. あまり理解していない
5. まったく理解していない

Q12. データ提出加算について，理解していますか？

選択肢

1. よく理解している
2. 少し理解している
3. どちらともいえない
4. あまり理解していない
5. まったく理解していない

Q13. 診療情報管理士にとって必要な能力であると思うものをすべて選んでください。

選択肢

1. コミュニケーション能力
2. 主体性
3. チャレンジ精神
4. 協調性
5. 誠実性
6. 責任感
7. 論理性
8. リーダーシップ
9. 創造性
10. 一般常識

3. 結果

Q2～Q13における回答の割合を図1～12に示す。

Q2 (図1) では診療情報の管理業務を選択した割合が最も高く，次に診療情報の活用業務，診療情報の点検業務，DPC 業務となっている。診療報酬の請求業務，診療情報提供の業務を選択した割合は低かった。

Q3 (図2) の質問では，情報機器の活用・電子化を選択した割合が高く，Q4 (図3) ではがん登録，Q5 (図4) では統計・分析，Q6 (図5) では入院会計，Q7 (図6) では診療記録の開示，Q8 (図7) では質的点検，Q9 (図8) では医療資源病名 (最資源病名) が高い結果となった。Q10 (図9) の診療情報管理士が関わる他の職種の質問では，すべての職種を選択した割合が最も高かった。Q11 の診療録管理体制加算およびQ12 のデータ提出加算についての理解については少し理解していると回答した割合が最も高い結果となった (図10，図11)。Q13 の診療情報管理士にとって必要な能力の質問については，責任感およびコミュニケーション能力の割合が高かった。

Q2～9の質問について，医療機関への就職希望の有無による比較を行ったが，希望の有無による回答の違いは見られなかった。

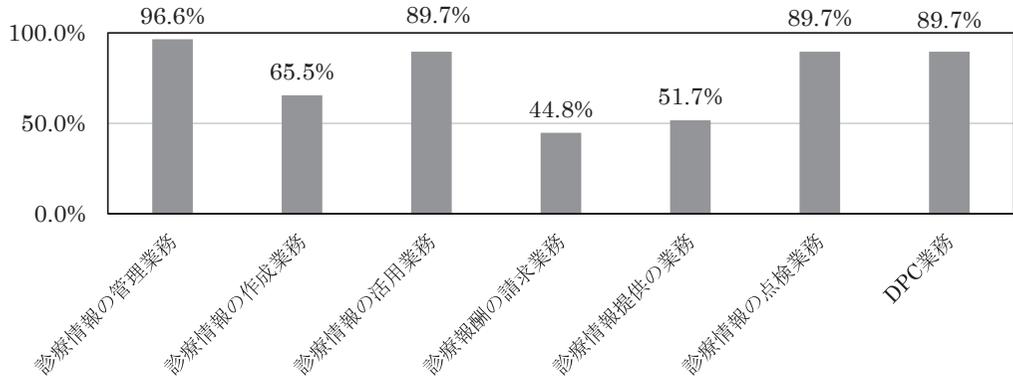


図1 Q2（業務内容）における回答の割合

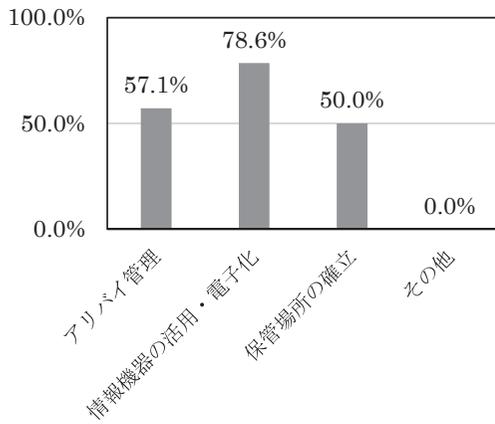


図2 Q3（診療情報の管理業務）における回答の割合

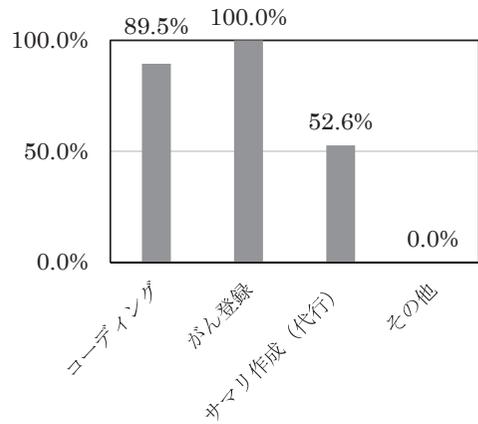


図3 Q4（診療情報の作成業務）における回答の割合

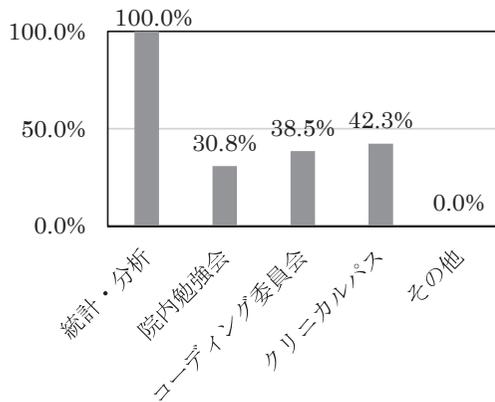


図4 Q5（診療情報の活用業務）における回答の割合

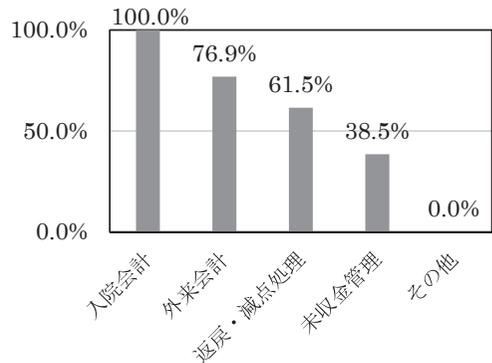


図5 Q6（診療報酬の請求業務）における回答の割合

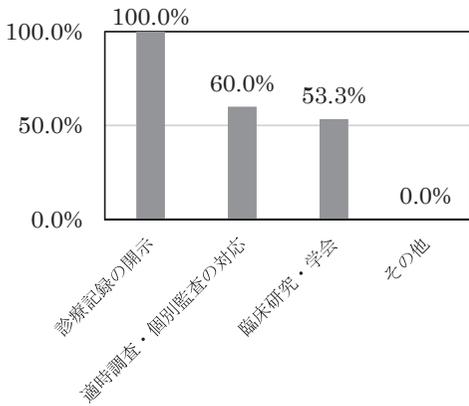


図6 Q7（診療情報提供の業務）における回答の割合

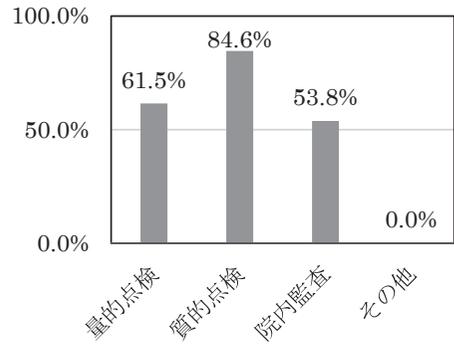


図7 Q8（診療情報の点検業務）における回答の割合

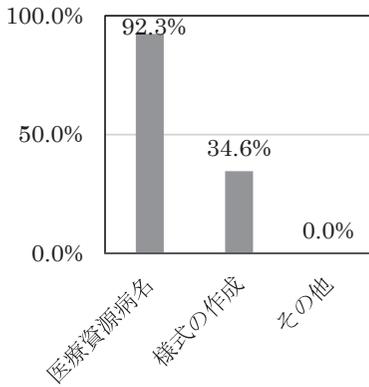


図8 Q9（DPC業務）における回答の割合

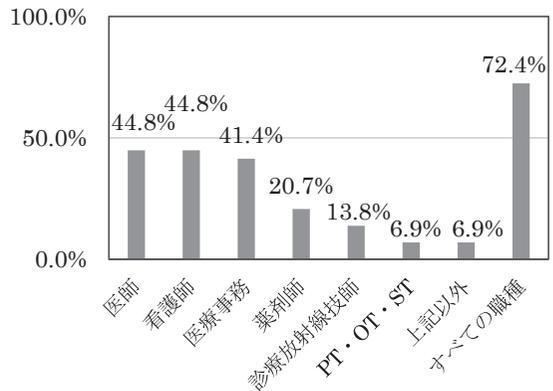


図9 Q10（他の職種との関わり）における回答の割合

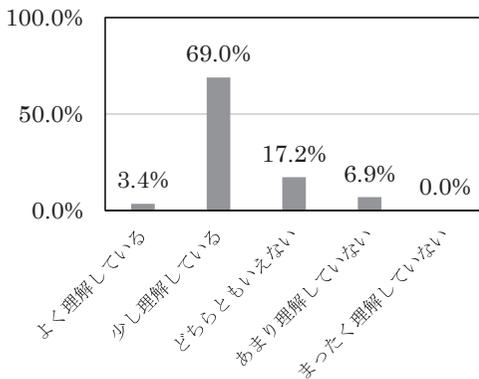


図10 Q11（診療録管理体制加算の理解度）における回答の割合

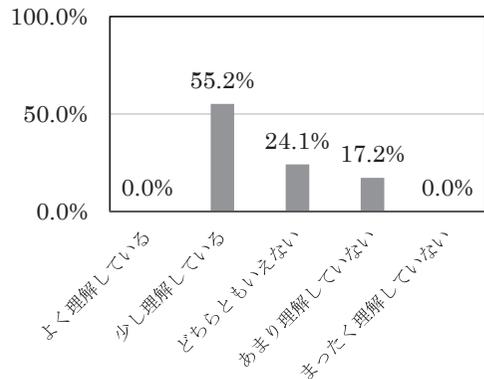


図11 Q12（データ提出加算の理解度）における回答の割合

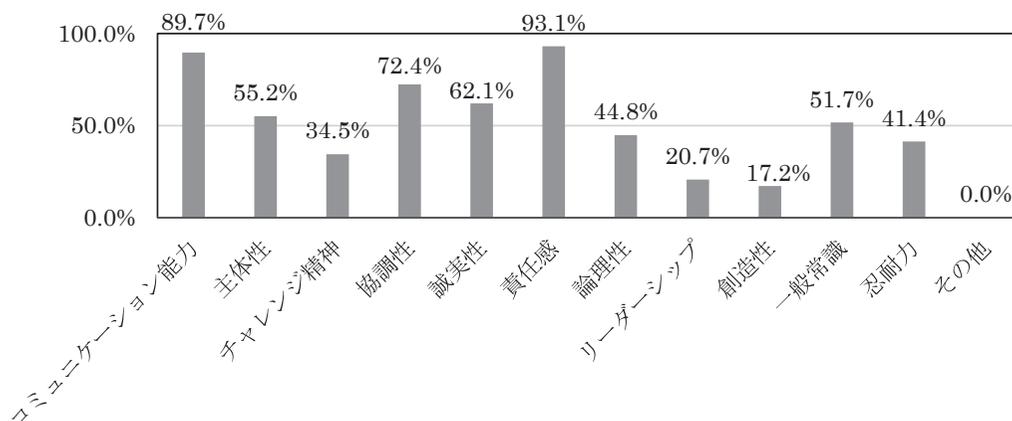


図12 Q13（必要な能力）における回答の割合

4. 考察

本報告では、診療情報管理士の資格取得を目指す学生にアンケート調査を実施し、診療情報管理士に対する職業意識について検討した。

本報告で行ったアンケート調査は、我々は自分で作成したものであり、診療情報管理士の業務についてどのように考えているかを問う仕様となっている。

Q2については診療情報管理士業務指針を参考に作成しており、指針では業務の範囲としては診療情報の管理業務、診療情報の活用業務、診療情報提供の業務、診療情報の点検業務の記載がある。Q2の選択肢にある診療報酬の業務については、診療情報管理士の業務ではなく、主に医療事務管理士や医事課の職員の業務であるが、診療情報管理士はDPCに携わることが多い。DPCは分類ごとに1日当たりの定額点数が示されているものである。そのため、診療報酬の請求業務を選択したものがいたと考えられるが、診療情報管理士としての業務と診療報酬請求業務を区別できていないものと考えられる。今後、区別ができるように指導していく必

要があると考えられる。診療情報提供の業務については、指針に記載されている業務であるが、選択した割合は低かった。診療情報の提供については、開示請求があったときに行う業務であるため、病院実習等で学ぶ機会が少ないものと考えられる。それにより回答の割合が低かったものと推測できる。その他の項目として診療情報の作成業務を選択肢としたが、これは指針には記載がない。しかし、Q4においてコーディング、がん登録などを選択肢としているため、作成業務を選択した割合も高かった。今後、アンケート調査を行う際、区別しやすいように工夫が必要であると考えられる。診療情報の管理業務や活用業務、点検業務などの割合が高かったが、診療情報管理士の定型的な業務として診療録監査が行われることがある⁶⁾。それにより、診療情報に関する業務の割合が高くなったものと考えられ、学生にとっても診療情報管理士は診療情報に関する業務を行う意識が強いことが示された。

Q3～9については、それぞれの業務について具体的に質問したものである。Q3の選択肢に情報機器の活用・電子化とあるが、近年、DPC

データを初めとする電子レセプトデータなど、標準化されたデータが普及し、多くの医療施設で利用可能な状況にある⁷⁾。回答の割合は78.6%となっていたが、電子化の重要性について意識が高くなることが望まれる。Q4においてはがん登録を選択した割合が100%となった。がん登録は各医療施設で必須となったため、割合が高くなったものと考えられる。その他特徴的なものとして、Q9のDPC業務についてであるが、様式の作成を選択した割合が34.6%と低かった。DPCでは様式の作成が強く関係しているため、選択するべき項目であり、実務では重要となる。そのため学生では実務に必要な知識が十分ではない可能性があると考えられる。

近年、診療情報管理士はチーム医療の一員として考えられているが、Q10の結果では、すべての職種と回答した割合が最も高く、Q13ではコミュニケーション能力、協調性と回答した割合が高かった。診療情報管理士については医療の知識だけではなく、コミュニケーション能力も必要不可欠なものとなっていくと考えられる。

我が国の医療は、狭義の医療から保健・医療・介護・福祉サービスを担う広義の医療に拡大し、診療情報の管理体制そのものを再構築しなければならない時代を迎えている¹⁾。それに

伴い診療情報管理士の重要性も増している。今回の調査では、学生は診療情報管理士の主な業務は診療情報に関する業務であるとの意識が強い結果となったが、回答の割合についてもバラつきがあった。今後、医療機関で働いている診療情報管理士に対して同様な調査を行い、学生との相違を検討することで、より実務に近い教育を提供できるようになると考えられる。診療情報管理士の業務も多様化するため、教育も多面的に行っていく必要があると考えられた。

参考文献

- 1) 日本病院会 (2017) 「診療情報管理士テキスト 診療情報管理Ⅲ」
- 2) 一般社団法人 日本病院会「診療情報管理士とは」
<https://www.jha-e.com/top/abouts/license> (参 照 2018-11-1)
- 3) 一般社団法人 日本病院会「平成29年度第11回診療情報管理士認定試験の結果について」
<http://www.jha-e.com/top/pages/cert11> (参 照 2018-11-16)
- 4) 日本診療情報管理学会 (2016) 「診療情報管理士業務指針」
- 5) 日本経済団体連合会 (2016) 「2016年度 新卒採用に関するアンケート調査結果」
- 6) 山田ひとみ・竹村匡正・岡本和也・黒田知宏・桑田成規 (2017) 「インフォームド・コンセント記載を対象とした診療録監査システムの検討」日本診療情報管理学会誌, Vol.29, No.1 : 53-61
- 7) 小原 仁・赤澤宏平 (2015) 「外来患者の診療時間に影響を与える要因の分析」日本診療情報管理学会誌, Vol.27, No.3 : 37-43